

2003 AUG.

No.509 平成15年

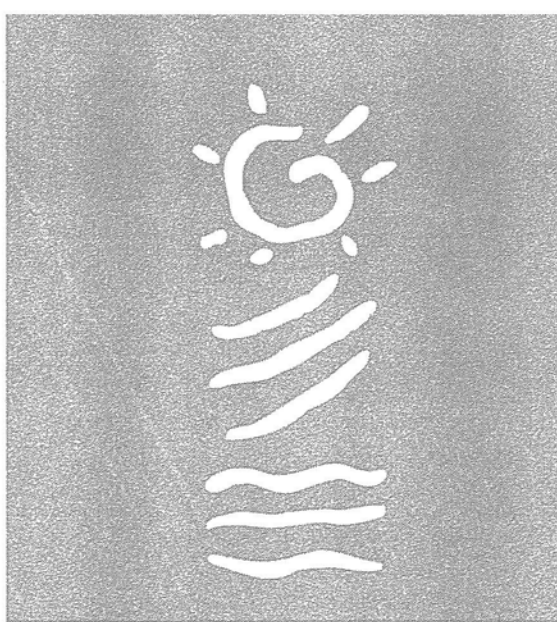
8

広報

じょうよう

編集・発行/上陽町役場総務課 印刷/東兄弟印刷

ホームページアドレス  
http://www.joyo-town.jp  
http://www.kisc.co.jp/kouikiken/joyo/  
メールアドレス info@joyo-town.jp



## CONTENTS [目次]

- 世界に誇る橋。 P1~7  
臘大橋が土木学会田中賞を受賞。
- 市町村合併について考える⑧ P8~9  
八女地区首長が合併を語る。
- こんにちは保健師です。 P10  
夏ばて注意報。
- 診察室からお元気ですか。 P11  
高血圧の治療は薬だけに頼らないで。
- わだいなちこち P16~17

## 人に、自然に、優しい町。

このマークは上陽町にあふれるほどの日差し、鮮やかな木々の緑、そして清らかな美しい水表現しています。  
私たちはこのマークを上陽町のシンボルとして自然とともに生きる町づくりに取り組んでいきたいと思ひます。



未来に架ける橋。

古代から私たちは、川や溪谷に、橋を架けてきました。木で、石で、そして鉄で、その時代の最先端技術を用いて。

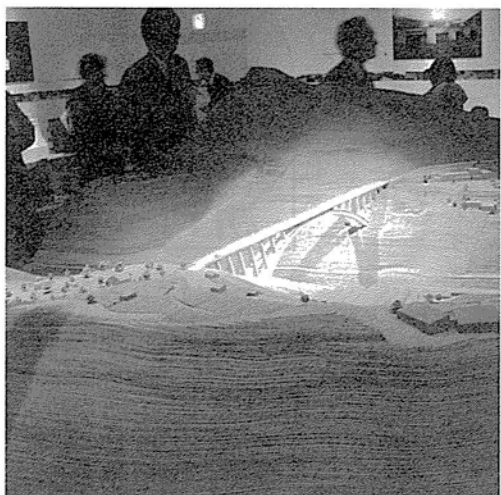
橋は、人やものを渡し、情報を運び、そこに交流を生みます。いつの時代にも、橋は未来への懸け橋として、そこに生きる人々の、さまざまな夢をつないできたのです。



## 龐大橋の模型を いただきました。

思わず息をのむ、等高線の織りなす地形美——コルクを主材料に作られた龐大橋とその周辺の模型を上陽町にいただきました。この模型は、五月九日から六月十四日まで東京で開かれた「グラウンドスケープ展」で展示されたものです。同展では、龐大橋の設計指導・監修を務めた篠原修さん（東京大学大学院工学系研究科教授）がデザインにかかわった橋やダムなど九件を紹介。目玉として、各計画ごとに作成された巨大模型が展示されました。龐大橋の模型は、大学生たち百三十人が約四か月間昼夜を通して作り上げたもので、実際の高低差を二五センチまで精密に表現されています。

いただいた模型は、現在元下横山小学校に保管されています。正式に公開する場所が決まりましたら、またお知らせします。



グラウンドスケープ展でも龐大橋模型は注目の的

### 編集後記

▼「これからの八女を考える7・12」大討論会に行ったときに感じたこと。私は筑後市内の高校に通いましたが、入学したとき周りの友達は何れも上陽町のことを知らなくて田舎である町を恥ずかしく思いました。ほかの八女東部から来ていた友達も、少なからずそう感じていたような気がします。しかしその後「まちおこし」とか「地方の時代」とか言われ、過疎の小さな町や村でも活性化のためにいろんなイベントなどが行われるようになり知名度もアップ。上陽町でも様々な取り組みをし、今では県内随一の「ホテルの里」であり「高級煎茶の取れる町」だと誇りに思えるようになりました。小中学生も、自分の町を堂々と紹介しています。「財政力が弱い所とは合併したくない」——合併問題が出てきたとき、同郷と信じてきた市部にお荷物として扱われている山間地域。自然の恩恵はすべてに享受されているのに、せめて町民の、子どもたちの、我が町を誇る気持ちに影が差さないようにと願うばかりです。Ⓚ

### 6月の人の動き

( )内は前年同月比

世帯数	1,190世帯 (+10)		
人口	4,266人 (-69)		
男性	1,989人 (-32)		
女性	2,277人 (-37)		
転入	12人	出生	3人
転出	12人	死亡	9人

この広報紙は再生紙を使用しています。





# 世界に誇る橋。

下横山の広川狭谷に架かる、虹のような美しいアーチ橋。  
八女東部観光の玄関口として、地域のシンボルとして、  
人々に見守られながら平成十四年三月、朧大橋は誕生しました。  
都市と山村をつなぐ希望の橋として、朧大橋は町の新たな歴史を刻んでいます。

# 朧大橋が、土木学会 田中賞を受賞。

平成十五年の土木学会田中賞を朧大橋が受賞しました。この賞は毎年橋梁・鋼構造工学に関する優秀な業績に対して授与されており、福岡県では初の受賞です。朧大橋は、設計・製作・施工・美観などの面において優れた特色を持つ橋として認められました。世界最高水準の橋梁技術を持つ日本で田中賞を受賞することは、世界に誇れる橋ということなのです。

朧大橋は、過疎化が進む上陽町の山里と久留米市を短時間で結ぶバイパス道路の中で建設されました。橋の長さ二九三メートル、アーチスパン一七二メートルの国内で八番目に大きい鉄筋コンクリート固定アーチ橋です。この辺りは筑後川自然公園内であり、奥八女観光地への玄関口にも当たります。そのため「自然と一体となった躍動感あふれるスマートで美しい橋」をテーマに、繰り返しデザインが検討されました。また上陽町は、明治から大正時代に架けられた石橋が現存する町でもあります。これら石橋の流れをくむ子孫の橋となるように、同じアーチ

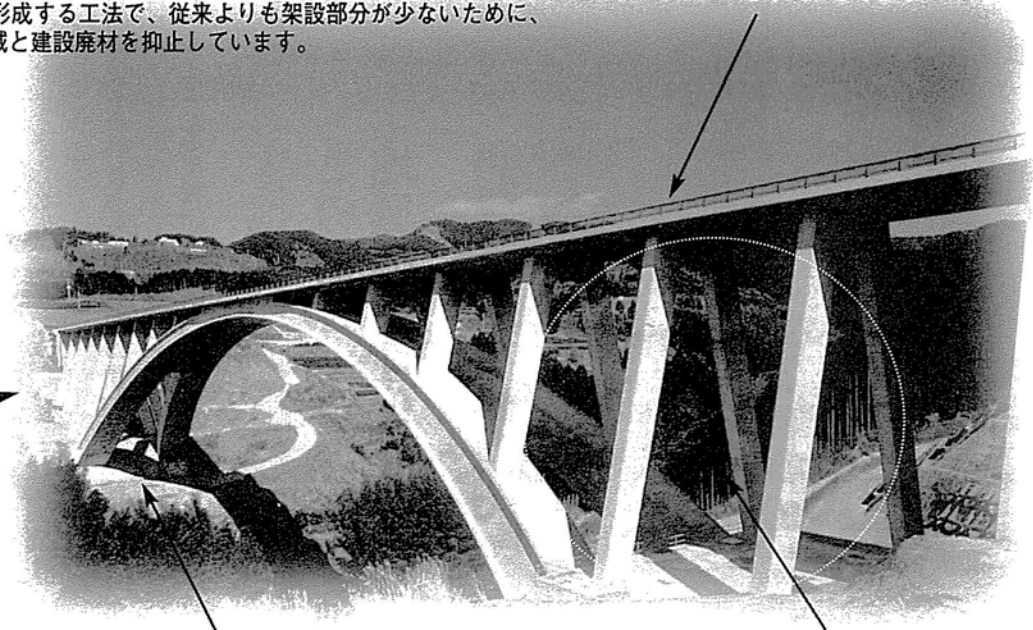
橋になりました。朧大橋の大きな特徴は、日本初の二股アーチリブ（足が開いている）ということなのです。これにより耐震性が大幅にアップしています。また、建設廃材として出る鉄鋼材の吊り支保工（アーチの部分を作るための支え）を橋本体に再利用するなど、コスト削減と環境にも配慮されています。朧大橋と同時期、橋のすぐ近くにオープンしたふるさとわらべ館とともに、朧大橋は上陽町の新しいシンボルとなりました。また、奥八女へ観光客を優しくいざなうウエルカムブリッジとしても期待されています。

## テーマは「躍動感、立体感」

朧大橋はピロンメラン張り出し工法による二股アーチ橋です。これはピロン（架設の鉄塔）を軸にしてメラン（鉄鋼部材）を張り出しながらアーチを形成する工法で、従来よりも架設部分が少ないために、大幅なコスト削減と建設廃材を抑制しています。

補剛桁は極力薄く軽量化が図られています。

橋の足元は埋め戻し、元の山に返すなど環境保全もされています。



アーチリブが分岐。二股構造のため耐震性に優れています。

あらゆる角度から見ても部材により視界が妨げられない構造です。

土木学会田中賞とは……

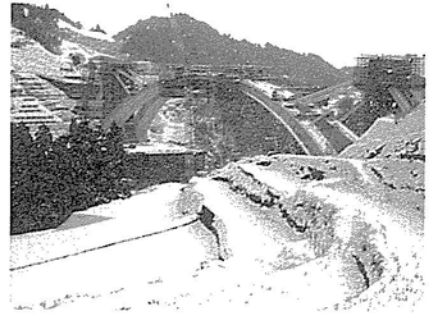
橋梁及びそれに類する構造物で、計画・設計・製作・施工・美観などの面において優れた特色を持つと認められるものに対し授与されます。「永代橋」「清州橋」などを生み出した橋梁・構造工学会の権威者・故田中豊博士の功績を記念して、昭和四十一年度に土木学会賞の一つとして創設されました。「作品」「研究業績」「論文」の三部門があり、作品部門には昭和六十三年に瀬戸大橋、平成元年に横浜ベイブリッジ、平成五年にレインボーブリッジ、平成九年に明石海峡大橋など名だたる名橋が受賞しています。



レインボーブリッジ

瀬戸大橋、レインボーブリッジも田中賞を受賞。



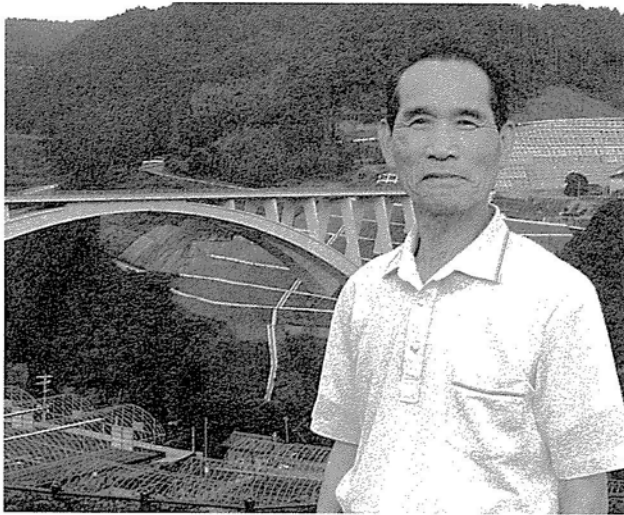


雪の中の建設風景（平成13年2月）

# 私たちの 朧大橋。

朧大橋が完成するまで、建築に五年の歳月が費やされています。その間、橋の見学場所が設置されました。建設現場を公開することにより、この地に誕生しできあがっていく橋の様子を関係者と一緒に地域住民も見守り続けました。下横山地域では、まちおこしに朧大橋を活用しようとただ今いろいろな案が検討されているところです。橋に対する地域の思いを取材しました。

この橋を一つの起爆剤として、  
地域の活性化を図っていくことが大事。

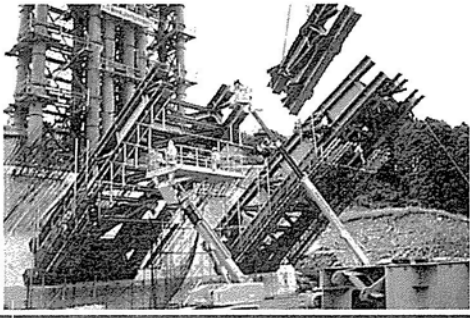


久間 茂信さん（82歳・仏尾）

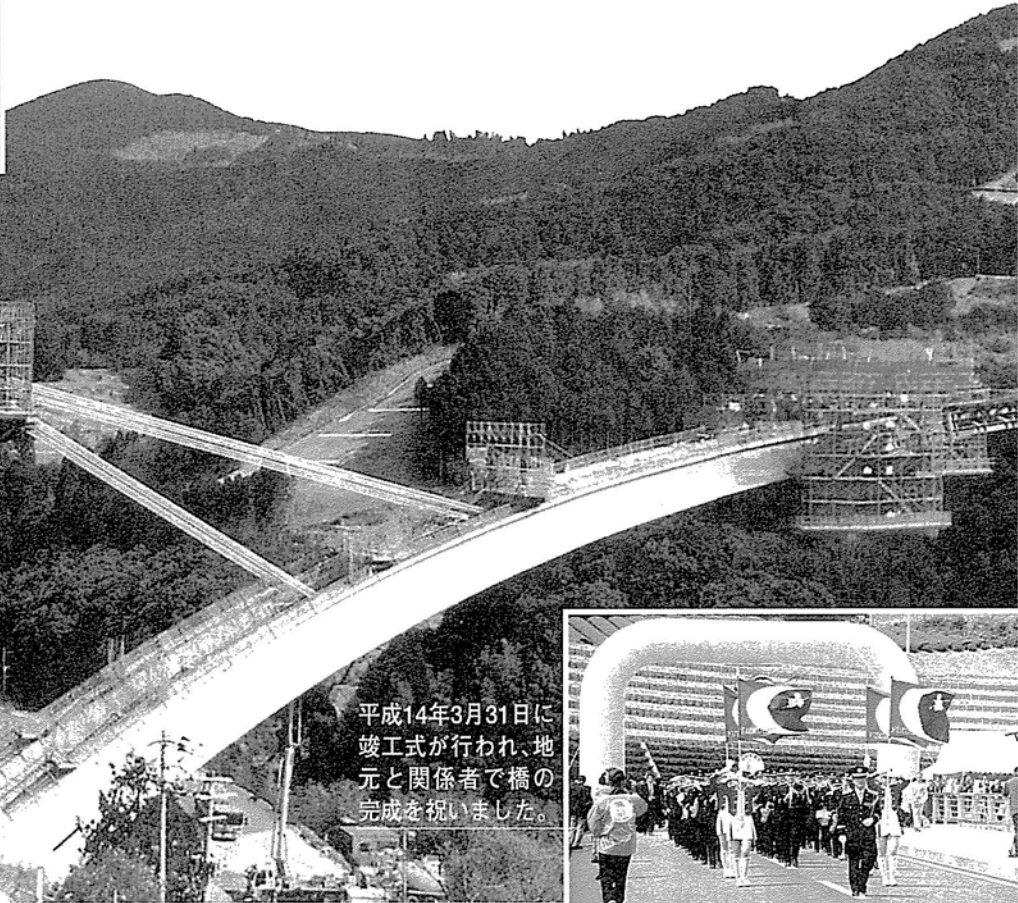
**私**はずいぶん以前より、下横山地区と久留米市を結ぶ道路の整備が必要と思っていました。この朧大橋が星野・矢部へと続く奥八女の玄関となり、奥八女の過疎化に歯止めがかかることを願っています。道は人を運び、文化を運んでくれます。この橋を一つの起爆剤として、みんなでかわいがりながら地域の活性化を図っていくことが大事だと思います。

今、朧大橋の近くに息子が家を建てています。この辺りはすごく見晴らしがいいので、ここに新しく住居を構えようと言う人も出てくるのではないのでしょうか。

朧大橋は力強いイメージがありますが、以外とデリケートです。293メートルと長く、下から支える構造になっていますので、温度の影響により、夏は昼と夜で中央部は5センチほど上下に動きます。このためアーチ中央部分をつなぐ工事は平成12年9月末、動きが止まる深夜に行われました。



平成11年建設初期、吊支保工の架設状況。従来の工法より約1200立方メートルのコンクリート撤去が不要になり、コスト削減と建設廃材抑止にも役立っています。



平成14年3月31日に竣工式が行われ、地元と関係者で橋の完成を祝いました。

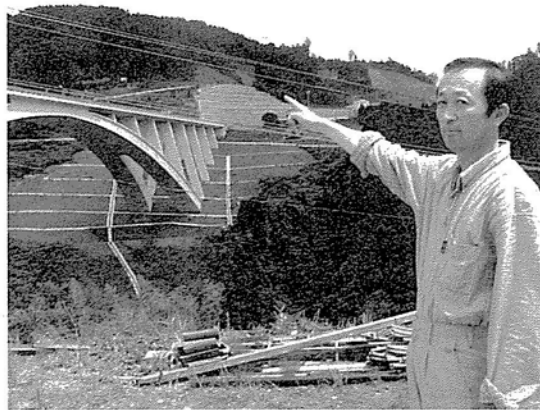


隼大橋の現場代理人  
三井住友建設(株)  
寺山 守さん(52歳)

**地元をあげての協力で完成した橋。誇りのもてる仕事をさせていただきました。**

隼大橋の工事は五年かかっており、最初地元の皆さんはどんなものができるのか、生活に支障を来さないだろうか、など多くの不安があったことと思います。しかし、工事の進捗に伴って小学校の通学路を変更していたなど、地域をあげて協力していただいたお陰

で無事に完成しました。このように、隼大橋は住民の皆さんと一緒に造り上げた橋です。私も誇りを持てるいい仕事をさせていただき、大変感激しています。その隼大橋が、このたび土木学会田中賞を受賞されたとのこと。本当におめでとうございます。



久間 健一さん(48歳・仏尾)

**隼**大橋のすぐそばが私のイチゴ畑なので「すごい橋ができるなあ」と、建設を5年間ずっと見続けてきました。ここで25年間イチゴを作っていますが、橋とわらべ館ができたことで辺りの風景がすっかり変わってしまいましたね。春と秋にちょうど橋の上の山から満月が昇るんですが、それはものすごくきれいです。正に隼月夜ですね。わらべ館でも9月に観月会がありますが、私は10月の月が一番きれいだと思います。その時にぜひ見にきてください。地元としては、隼大橋ができたことによって一日も早く久留米までの道が整備されることを願っています。

**橋ができたことにより、久留米までの道が一日も早く整備されることを願っています。**



# 交流を生み、人をつなぐなぐ橋。

石橋の子孫として、町のシンボルとして、かわいがってもらえることが喜び。

ホテルと石橋の里上陽町に、現代の最先端施工技術を駆使した隼大橋が都市との交流の場として、新たなランドマーク（その土地の象徴となる建造物）として仲間入りしました。私と隼大橋の出会い

は平成六年。以来、橋の形式検討・詳細設計・工事の管理業務など、約八年間に渡り携わってきました。

れ、委員の方々と模型を使いながら「自然と一体になった躍動感のある橋」を目指し、熱心に検討しました。その結果、二股分岐のアーチリブを持った我が国初の構造になりました。この隼大橋を素晴らしい自然環境の中でできるだけ安く造るために、最新のコンピュータシステムを現場に持ち込みました。人間では不可能なデータを解析して、安全でいいものを安く造ることができました。

隼大橋の部材は、一つ一つが現

場で造り上げた手作りのものです。百年の時の隔たりはあっても、石橋の建築と変わりません。その建設風景を見学できるよう開放し、地元の方々に見守られながら隼大橋は完成しました。完成したとき「大変な難産やったね」という声を聞き、見せることで地域と一緒に造っていった橋だと実感しました。このような橋造りは初めてでした。

以上のような功績が認められ、今年五月には橋の最高賞である土木学会・田中賞を福岡県では初めて授賞しました。田中賞は、橋そのものに与えられる賞です。隼大橋建設に携わった関係機関はもとより、土地の提供者、工事中のわずらわしさを我慢してくださった地元の方々や、隼大橋の姿を心配そうに見守ってくださった方々など、すべての方たちに対していただいた賞だと思えます。地域の人々は橋の姿から、「おぼろ月夜にウサギが跳ねる」イメージを想像されています。隼大橋は単に渡るだけではなく、石橋の子孫として上陽町のシンボルとして、永年にわたり可愛がってもらえることが設計者として最高の喜びです。



武末 博伸さん

(たけまつ ひろのぶ)

株式会社建設技術センター

隼大橋設計チームリーダー。橋の設計に携わり25年、地域密着型のコンサルタントを行う。44歳。



現在、隼大橋周辺では様々なイベントが催されています。ふるさとわらべ館で行われているマウンテンバイク大会では橋がレースコースの一部になっています。(写真・左)  
2月に地域の子ども会で行われるほっけんぎょうも、橋をバックにたいまつの火がともされました。(写真・右)

# 真下から見たときは圧倒されました。

●藤吉則英さん(七三)、邦子さん(六八) 夫妻(広川町)

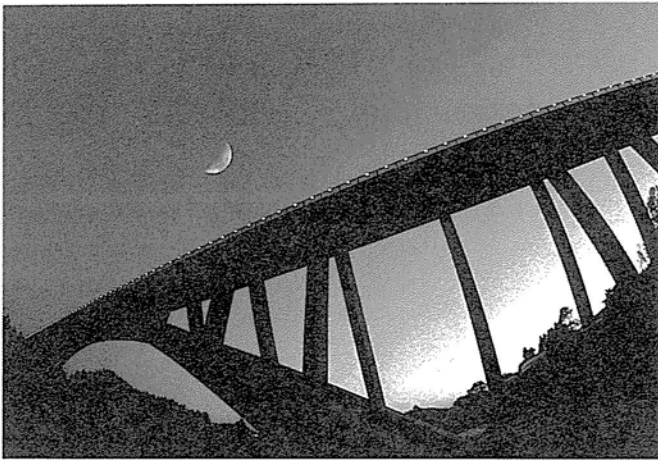
藤吉さん夫妻は上陽町観光協会写真コンテストで龐大橋を撮り、昨年度入選・今年度は最優秀賞を受賞されました。橋の魅力を知り尽くしたお二人です。

趣味で写真を撮るようになって四年。自然の美しさにひかれて、いろんな所に出かけて写真を撮っています。おとしから各地のコンテストに応募するようになりました。龐大橋を最初見たときは、山の中に大きな橋が架かっているのにびっくりしました。横から見たり下から見たり、いろんな角度から見ましたが、真下から見たときは圧倒されましたね。

今まで龐大橋を撮りに、雪が降っているときも二回行きました。今年コンテストで最優秀賞をいただいた

写真は、十一月の寒い時期に撮影したものです。夕焼け・三日月・橋のライト点灯など一番いい時間を狙って、数回足を運びました。あちこち場所を替えながら、二人でファインダーをのぞいて、これだと思う瞬間にシャッターを切ります。もう二度と同じ写真は撮れないでしょう。

龐大橋は、季節や時間などその時々によって雰囲気が変わる表情豊かな橋だと思います。緑の山の中にあるから映えるんですね。今度は真正面からの写真に挑戦します。



今年度最優秀賞に輝いた「夜空の幻想」(先月号にカラーで紹介)

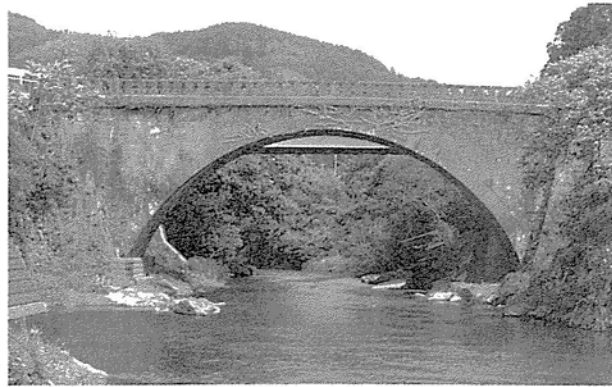


「橋のアーチから山がのぞく空間のバランスに気を使いました」と、藤吉さん夫妻

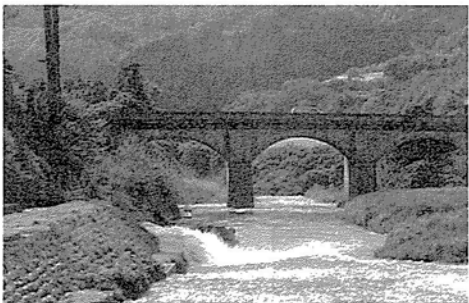
# 石橋の文化が息づくまち。



寄口橋(二連アーチ橋・大正9年竣工)



洗玉橋(一連アーチ橋・明治26年竣工)



大瀬橋(三連アーチ橋・大正6年竣工)

## ■上陽町に脈々と受け継がれる石橋文化

上陽町には明治26年、熊本県の通潤橋を手がけた肥後の名工・橋本勘五郎最後の作となった洗玉橋が架けられています。当時石橋は、朽ちることもなく洪水でも流されない半永久的な夢の橋でした。江口半蔵北川内村長は、「せっかく架けるのなら名工・橋本勘五郎にお願いしよう」と、交渉。今のお金に換算して約3億円(当時の政府高官の月給により換算)の巨費を投じ、洗玉橋を建設しました。石橋は、文化と交流の行き交う人々の生活に大きく貢献しました。この地域にはその後も次々と石橋が架けられ、現在上陽町には13の石橋が大切に保存されています。

取材を終えて

「橋」と「箸」—まったく違うものを差しますが、実は「空間を渡すもの」として、古来より共通の意味があるのだそうです。橋は人やものを渡し、箸は口に食べ物を渡します。今回橋をいろいろ調べていて、そんな興味深い説を見つけました。昔から人間にとって橋はただの建造物以上のもので、魂を持ち、空間をつなぎ、出会いと別れの縁(えにし)を作る場であったんですね。私は三瀬上陽線を通じて通勤していますが、上陽町に入るとすぐに大瀬橋が「おはよう」と出迎えてくれます。龐大橋も町の北の玄関として、訪れる人を優しく迎える橋となりました。これから龐大橋は、町にどんな縁を運んでくれるのでしょうか。最後に、資料や写真を提供していただいた皆様、お忙しい中快く取材にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。